

秋摘み茶生産は、「おくみどり」が多収で収益性が高い

野菜・茶業研究所

近年、ドリンク原料向け夏茶生産が行われているが、中山間地域においては、地域の最終摘採時期より遅れて三番茶を摘採すると翌一番茶の収量が低下する恐れがある。これまで三番茶芽を摘採せずに伸育し、来年度の母枝を確保した後に秋摘み茶生産をおこなう技術を紹介した（平成18年普及カード）。そこで、中山間地域における主要品種において秋摘み茶の収量、収益性と最終摘採時期について紹介する。

【普及したい技術のポイント】

- ①秋摘み茶の収量は、主要品種の中で「おくみどり」が多収で収益性が高い。
- ②主要品種の最終摘採時期は、秋整枝までの日平均気温20℃以上の積算温度で約380日度（アメダス観測値）が確保できる7月下旬である。
- ③秋摘み茶生産は、三番茶の摘採が最終摘採時期（7月下旬）より遅れる中山間地に活用できる。

【秋摘み茶の品種別収量と収益】

秋摘み茶の収量は、「おくみどり」が多収で収益性が高い（図1、表1）。やぶきたは劣る。

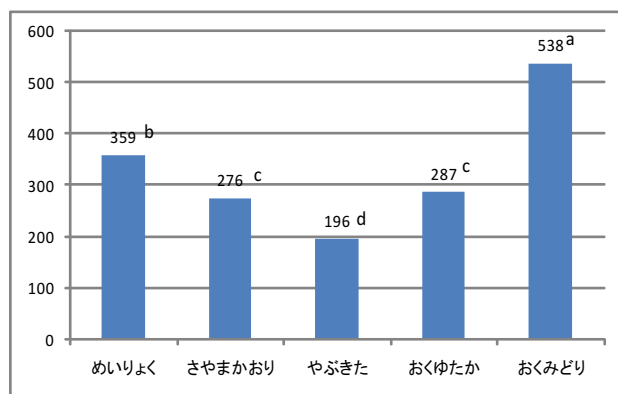


図1 秋摘み茶の品種別収量 (2008年)

異なる文字間には5%有意差あり (tuky多重比較)

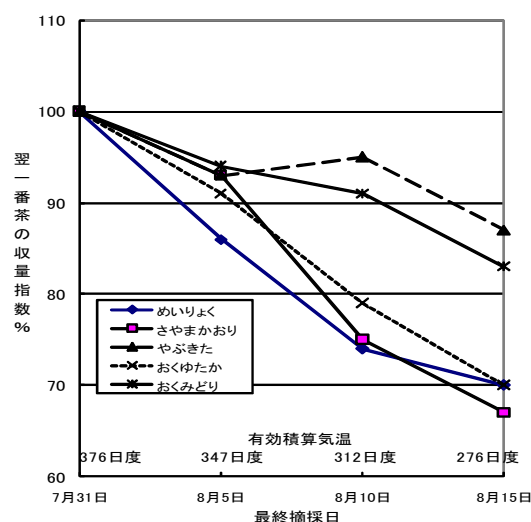


図2 主要品種における最終摘採日が翌一番茶の収量に及ぼす影響 (2008年)

表1 秋摘み茶の品質と収益性

品種	荒茶		単価 (円/kg)	収入 (円/10a)
	全窒素 (%)	遊離アミノ酸 (%)		
めいりよく	3.8	2.0	500	41,285
さやまかおり	3.7	2.0	500	31,740
やぶきた	3.7	2.0	510	22,991
おくゆたか	3.6	2.2	500	33,005
おくみどり	3.8	2.4	480	59,395

【最終摘採時期の決定】

主要5品種の最終摘採時期は、7月下旬と考えられる（図2）。最終摘採日が遅れるほど翌年の一番茶収量は低下し8月15日では品種によって30%以上の減収となる。

【普及上の留意点】

三番茶芽を十分に伸ばし、秋摘み整枝により芽数が増えるようにする。

秋摘み整枝は、遅くとも8月20日頃までにおこなう。秋摘み整枝が遅れると秋芽が徒長枝となり荒茶に多く混入して品質が低下する。

また樹勢が弱まっている場合は、秋摘み茶生産は行わない。